

建設技術者のための この一冊

月刊「建設」では2020年3月号より新コーナーとして「建設技術者のためのこの一冊」の連載を開始しました。新旧の学術図書、隋筆、小説等を紹介し、会員の皆様の自己啓発、幅広い見識の形成等にお役立てください。

新装版

無名碑 上 下

著者：曾野綾子

発刊：講談社

定価：上下巻各 830円（税別）



この小説の主人公、三雲竜起は、建設会社に勤務する土木技術者である。三雲は只見川のダム、名神高速道路の建設に従事し、さらにタイへ赴き、アジア・ハイウェイの工事に立ち向かう。過酷な自然、厳しい施工条件のもとでインフラ整備に挑む誠実な土木技術者が描かれている。小説を読み進むにつれて、昭和20年代から40年代頃のダム、高速道路、インフラ輸出といった戦後の建設技術の展開や当時の工事現場の実情を知ることができる。

「無名碑」は著者、曾野綾子氏が土木に対する理解を深めるきっかけとなった小説である。約3年にわたり、ダムやトンネルの工事現場で取材を重ね、昭和49年に刊行された。

「川筋には、神が太古の昔からここへいつかダムを作るという予定のもとに山を狭めてあるとしか思われぬ場所が必ず幾つかある」。クリスチャンであり、土木を勉強された曾野氏ならではの筆致である。

三雲は、結婚して間もない妻容子とダム予定地の近くを散歩しながら「僕の仕事は一生どんなにいい仕事をしても個人の名前は残らない」と語る。妻は「書かないのがすてきだわ。名前は残らないほうがいいの」「でも、私たちの子供が覚えていてくれるでしょうね。私、子供に教えるつもりよ。このダムはね、お父さんが作ったのよ、って」と応える。この会話が「無名碑」の書名につながったのだろう。

近年では、工事に携わった技術者の名前を銘板として刻もうとする動きが出てきている。約2年前にハッ場ダムの本体打設や東京外かく環状道路のシールド掘削を視察された曾野氏は、最新の技術を導入して自動化が進み、入念に安全管理が施されている工事をご覧になり、工事現場の様変わりに驚かれていた。

しかし、時代は変われども、インフラ整備に対する技術者の使命感は変わらないはずである。